

主 題：イスラエルの罪と神の真実さ

聖書箇所：ローマ人への手紙 9章6-13節

イスラエルは神からすばらしい約束をいただいていた。多くの祝福をいただいたイスラエル、前回、私たちはそのことを見ました。けれども、そのようなイスラエルは悲しいことに、神の前に罪を犯し、神に逆らい続けているのです。イエス・キリストを拒絶しただけでなく、彼を十字架につけて殺したイスラエル。

★神の約束はいったいどうなってしまったのか？

その現状を見て人々は思うのです。「では、神の彼らを救うというその約束はどうなってしまったのか？神が彼らに与えられた数々の約束は途中で挫折してしまっただけなのか？」と。神の約束を聞いて、そして、現状を見た時に多くの人々はそのように思ったのです。

●神は真実なお方

パウロが教えようとするのは、まず、私たちの神は絶対に約束を破ったり、変更したりするようなお方ではないということです。神が言われたなら必ずその通りになるのです。ですから、もし、神がご自分の言ったことを変更したり、それを守れないならもう神ではありませんし、神ご自身のご性質に全く反するものです。というのは、「真実」、つまり、約束を守る、言われたことは必ずその通りに為さるというのが神のご性質だからです。申命記7：9を見ると「あなたは知っているのだ。あなたの神、主だけが神であり、誠実な神である。」、日本語に訳されている「誠実な」ということばは「信頼し得る、忠実な」という意味です。真実なお方である。言われたことは必ずその通り守られるお方、そのような神だとみことばは私たちに教えます。エレミヤがエルサレムの崩壊している様子を見ながら涙ながらに語ったことが、哀歌3：22-23に記されています。「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。：23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。」、同じことが言われています。たとえ、私が喜ぶことが出来ない悲しいことが周りにたくさん起こっていても、現実には自分の目の前で愛するエルサレムがこのような惨事に直面していても、神のご性質は変わらない、神は約束を守られる方だからと、そのように神の真理を告白しているのです。

新約の時代でも、ヘブル人への手紙10：23には「約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。」、つまり、著者は「信仰者は神によって守られている」と言うのです。神があなたを捉えてくださっている、そして、約束を与えた神はその約束を守り続ける方だから心配しなくてもいい、しっかりと希望を持って継続して主を信頼し続けるようにと言うのです。ですから、旧約の時代にあっても新約の時代にあっても、信仰者たちが確信を持っていたことは「私の神は約束を必ず守られる方」ということです。その信頼を持って彼らは歩んでいたのです。

ですから、パウロがしようとするのは、このローマの教会の人々に、神が常にすべてのことをご自身の計画、ご自身のみこころに沿って為しておられる、たとえ、私たちに分からないことであっても、神は常にご自身のみこころを為しておられると、そのことを教えようとするのです。これは、突然変わってしまったり、途中で頓挫するようなことは決してないのです。パウロはそのことを教えるために、このような表現を使っています。6節「しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。」と。

「無効になった」とは「離れ落ちる、しぼむ、失う、衰える、弱る」と、そのような意味を持ったことばが使われています。そして、「神のみことば」とは「神の約束」のことです。特に、私たちが何度も見て来たように、イスラエルが救われるという約束に関して、その約束が衰えてしまったり、弱ってしまったのではない、その約束は今も生き続けている、約束は変わっていないということをパウロは言わんとしているのです。このことをここに記したのは、当時の人々がそのように思っていたからです。初めに言ったように、彼らは確かに神の約束を耳にしたけれども、現実を見た時に「神さま、いったいあの約束はどうなってしまったのでしょうか？」と疑問をもっていたからです。そこでパウロは、約束は変わっていないし、神は継続してみこころを為しておられると、パウロはそのことをローマの教会の人たちに教えようとするのです。

実は、パウロはこのことをこの9章から11章を通して教えようとしているのです。私たちの神は決して約束を破られない、必ずその約束を守られる方であると、そのことを繰り返して教えるのです。皆さん、イザヤ書55章のみことばをよく覚えておられるでしょう。55：11「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、

わたしの言い送った事を成功させる。」、力強いみことばだと思いませんか？わたしのことばは必ずわたしの望むことを成し遂げる、わたしが言ったことは必ずそのようになる、成功すると言うのです。主権者なる神の宣言です。私たちの神の宣言です。「わたしはこのような存在であり、わたしはこのようなことを成して来たし、これからも成し続ける。わたしは神だ。」と宣言しておられるのです。ですから、ただ私たちが分からないだけで、神はご自身の計画、みこころを遂行しておられるということ言うのです。そして、パウロはこれからそのことを教えようとするのです。ローマの人々に、そして、今の私たちに。神はイスラエルを救われる、その約束は必ず実現するという事です。しかし、確かに、多くのイスラエル人たちは神に逆らい続けている、神を拒み、イエス・キリストを拒み、イエスは死んでいった…。そこでパウロは説明をするのです。このイスラエルについての説明です。

☆イスラエルについて : 二つのイスラエルについて語る

A. 民族としてのイスラエル

6節の続きを見ましょう。「…なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、」とあります。お気付きのように、ここには二つのイスラエルが記されています。「イスラエルから出る者」とはこれは明らかに民族としてのイスラエルのことです。イスラエル民族のことです。その者たちが「…みな、イスラエルなのではなく、」というの、民族ではありません。この二つ目のイスラエルは主イエス・キリストを信じた、また、信じるユダヤ人のことです。ある人々は、この後半のイスラエルはユダヤ人のことよりも教会を指しているのではないかと考えますが、9章から11章を見ると、イスラエルということばが教会に置き換わっている箇所はありません。しかも、この文脈を見ると、パウロはここでイスラエル民族の話をしています。彼らに与えられた約束の成就のことを話しています。ですから、パウロがここで言わんとしたことは、このイスラエル民族の中で、主イエス・キリストを信じる人たちのこと、特にここはそれに限定していると思うのです。

パウロはこう言います。「イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、」、つまり、神からの約束を得たのはイスラエル民族のすべてではなくて、その中の一部であったということ言うのです。つまり、パウロはここで再び私たちがすでに学んで来た「選び」ということについて教えるのです。神の約束が与えられる、でも、それは民族のすべてに対してではなくて、その中の神が選ばれた人たちに対して与えられた約束だと言うのです。実際に、この当時、イスラエル民族、ユダヤ人たちはイスラエル民族に属しているだけで救われていると信じていました。ですから、パウロはここで、イスラエルの中の選ばれた者たち、救われた者たちだけが本当の意味でのイスラエルなのだと断言しているのです。

よく考えてみると、確かに、主イエス・キリストがこの地上にお見えになって十字架に架かって行かれるまでのその様子を見た時に、多くのユダヤ人たちがイエス・キリストに反旗を翻しました。イエスを十字架につけて殺すことに賛成しました。しかし、みながそうであった訳ではありません。イスラエルの教師たちの中に、律法学者たちの中に、イエス・キリストの教えを聞いて信じる者たちが起こっています。ですから、すべてのユダヤ人たちが神に逆らったのではなかったのです。しかも、初代教会を見てください。ペンテコステのときにそのメインはユダヤ人です。十二使徒たちも、そして、パウロもユダヤ人です。ですから、確かに神の約束というのはイスラエル民族に与えられた、でも、それはイスラエル民族すべてにではなくて、その中で神が選ばれた人たちだけにそのような約束が与えられていたということをパウロは言っているのです。それは、もうすでに私たちが見て来た様に、私たち異邦人の間においても同じことが言えるのです。あなたも神が選んでくださったからこの救いに与ったのです。そのことをパウロはここでこのイスラエルに関して言うのです。

そして、7節からそのことを二つの例によって説明しています。一つは、アブラハムの子どもに関して、もう一つはイサクの子どもに関して、読者がよく分かるたとえを与えています。

B. 真のイスラエルについて : 二つの例によって説明

1. アブラハムの子ども 7-9節

7-9節「アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」のだからです。:8 すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。:9 約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」、パウロはここで、アブラハムのすべての子どもたちに約束が与えられていたのではないということ言ったのです。

1) 否定的説明 7-8節

まず、7節と8節を見ると「否定的な説明」が二つあります。7節に「アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、」とあり、8節には「肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、」とあります。ですから、ここでパウロは、アブラハムから産まれたすべての者たちが約束の子どもでも神の

子どもではないと言っているのです。そのことを言ったパウロは、8節の終わりに「約束の子どもが子孫とみなされる」と言っています。つまり、アブラハムの子孫の中に本当の約束の子ども、神の子どもがいると言っているのです。アブラハムから出た者たちの中に選ばれた者たちがいるということです。

2) 肯定的説明 9節

肯定的な説明が9節に出て来ます。「約束のみことばはこうです。」と書かれています。8節には「神の子ども」、「約束の子」ということばが使われていますが、これは「肉の子ども」、イスラエル民族全体のことではなくて「選ばれた者たち」のことです。「肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。」とある通りです。神の約束が与えられましたが、それはアブラハムの息子の中の一人イサクにです。アブラハムは子どもを持ちましたが、ご存じのように子どもはイサクだけではありませんでした。

(1) 他の子：アブラハムの子どもたち

アブラハムに産まれた最初の子はイサクではありませんでした。イシュマエルでした。アブラハムとサラの間に子どもがなかったため、サラに仕えたエジプト人の女奴隷があてがわれて、彼女が男の子を産みました。それがイシュマエルです。彼は言うならアブラハムの長子です。しかし、神の約束は、アブラハムの中から生まれたイシュマエルではなく、イサクを通して成就して行くこととみことばは約束しています。そのことは創世記に記されています。21:12「すると、神はアブラハムに仰せられた。

「その少年（つまり、イシュマエルです）と、あなたのはしためのことで、悩んではならない。サラがあなたに言うことはみな、言うとおりに聞き入れなさい。イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるからだ。」、アブラハムには子どもがいたのですが、神が選ばれたのはイサクだったということです。子どもたちみなに同じように約束が与えられたのではなく、約束が与えられたのはイサクであったと言うのです。

実際に、サラが亡くなった後、アブラハムはもう一人の妻をめとります。ケトラという人物です。創世記25:1-4を見ると、ケトラはアブラハムに6人の息子を残しています。「アブラハムは、もうひとりの妻をめとった。その名はケトラといった。:2 彼女は彼に、ジムラン、ヨクシャン、メダン、ミデヤン、イシュバク、シュアハを産んだ。:3 ヨクシャンはシェバとデダンを生んだ。デダンの子孫はアシュル人とレトシム人とレウミム人であった。:4 ミデヤンの子は、エファ、エフェル、エノク、アビダ、エルダアであって、これらはみな、ケトラの子孫であった。」、ですから、アブラハムにはイサクの他にも子どもがいたのです。

(2) 約束の子：イサクの選び

しかし、神がその中で選んだのはイサクでした。神はイサクを選ばれたのです。創世記17章には、アブラハムが神の約束、つまり、サラが子どもを産むと聞いたときにアブラハムが神に言ったことが記されています。18節「そして、アブラハムは神に申し上げた。「どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように。」、神の答えは19節「すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」です。

・誕生の奇蹟：アブラハムとサラには子どもがなかった

このイサクの誕生は確かに奇蹟でした。皆さんご存じのように、アブラハムとサラには子どもがありませんでした。ですから、今見た創世記17章を見ると、サラが子どもを産むと言われたときに、アブラハムもサラもそのことを信じる事が出来ませんでした。17:17「アブラハムはひれ伏し、そして笑ったが、心の中で言った。「百歳の者に子どもが生まれようか。サラにしても、九十歳の女が子を産むことができようか。」とこのように言っています。18:11には「アブラハムとサラは年を重ねて老人になっており、サラには普通の女にあることがすでに止まっていた。」とあります。少し戻って、創世記11:30には「サラは不妊の女で、子どもがなかった。」とも記されています。ですから、人間的に見るならこの二人に子どもが生まれることは不可能に思えました。そのようなときに神のメッセンジャーがこのように告げるのです。創世記18:10「するとひとりが言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには、男の子ができています。」サラはその人のうしろの天幕の入口で、聞いていた。」、そして、それが今私たちが見ているローマ人への手紙9章に出て来るのです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」

主の使いはアブラハムに非常に大胆な宣言をします。「わたしは来年の今ごろ、」と時期を想定しているのです。そして、ローマ人への手紙には記されていませんが、創世記の中では産まれてくる子どもが男の子であることも明言されています。子どもが産まれてくるその時期に関しても、産まれてくる子の性別に関しても、主の使いはそのことを預言しています。そして、その通りサラは男の子を産むのです。ローマ書に戻って、9:9では「約束のみことばはこうです。」と言っています。つまり、神の約束は必ず

その通りになるということです。確かに、神は「イスラエルを救う」と言われました。すべてのイスラエル人が救われると思ったのは私たちでした。でも、神のメッセージが伝えたことは、その中で選ばれた者たちがこの救いに与るということでした。それがメッセージだったのです。ですから、どの時代にあっても、あのイエス・キリストを十字架に磔にしたあの時代であっても、神はその中で救われるイスラエルの人々を選んでおられたのです。パウロはそのことを言うのです。

「神の約束はどうなってしまったのか？」と言う彼らに対して、神の約束は約束通りに成就している、神は約束を曲げておられないし、約束を挫折されたのでもない、その約束通りにすべてのことが進んでいると言うのです。そのことをまずアブラハムを通してパウロは教えました。

2. イサクの子ども : イサクからヤコブへ 10-13節

次に、10-13節で、今度はイサクの子どもに関して、その例をもってこのことを教えようとしています。ここにも神の選びがあるということを教えています。10節「このことだけでなく、私たちの先祖イサクひとりによってみごもったりベカのこともあります。」、アブラハムのことから今度はその子イサクのことへと移るのです。イサクとリベカのことです。神はこのイサクとリベカにも素晴らしいわざをなさいました。

1) 約束の子 : 主はイサクとリベカに子どもを託された 10節

創世記25:21には「イサクは自分の妻のために主に祈願した。彼女が不妊の女であったからである。主は彼の祈りに答えられた。それで彼の妻リベカはみごもった。」と記されています。そして、26:23-24には「彼はそこからペエル・シェバに上った。:24 主はその夜、彼に現われて仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしがあなたとともにいる。わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加えよう。わたしのしもべアブラハムのゆえに。」、このように神の約束がイサクに与えられるのです。そして、この約束は成就します。

2) ヤコブの選び : 神の一方的なみわざ

(1) 二人が産まれる前から定められていた 11-12節

11節には神の選びのことが記されています。「その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、」、これはイサクとリベカの子どもたちのことです。「善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、」とこのように記されています。つまり、神はイサクを通して約束を成就なさると言われたのです。そして、イサクとリベカの間には子どもを与えられました。しかし、神は与えられた子ども中でヤコブを選んでおられたと、つまり、選びのことをここでも繰り返すのです。創世記25:22-23には、今私たちが見ていることがこのように記されています。「子どもたちが彼女の腹の中でぶつかり合うようになったとき、彼女は、「こんなことでは、いったいどうなるのでしょうか。私は。」と言った。そして主のみこころを求めに行った。:23 すると主は彼女に仰せられた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。」、まだ生まれる前からこのようなことが定められていたのです。双子が生まれること、しかも、生まれる前から神が弟を選ばれたことを言っているのです。おもしろいですね。双子が生まれて来るのです。若干早くエサウが生まれて来ました。でも、神はその前から弟を選んだと言うのです。どちらが先に生まれて来るか、もうすでに神の御手の内にあるのです。

(2) 神の一方的な選び

そして、その神の選びがどういうものか、その説明が記されています。「まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、」神が選んだと。ということは、兄のエサウに比べて弟のヤコブが立派なことをしたから神が選んだのではありません。彼らが全く何もできないときから、まだ何もしていないときから神ご自身がそのようにお定めになった、お決めになったのです。これが神の選びです。人の行ないの結果ではないのです。ですから、私たちが神によって選ばれたと言うとき、それは私たちが何か特別なことをしたから神が選んでくださったのではないのです。私たちは罪に罪を重ねることしかできなかったのです。神の栄光を汚すことしかできなかった、神に逆らい続けることしか出来なかった。でも、神はそのようなあなたを選んでくださり、その罪の中から、罪の深みから救い出してくださったのです。

この「救い」とは、確かに、神の一方的な恵みです。私たちもしっかりそのことを覚えて感謝することです。何かをしたからではありません。どのような家系に生まれようと、どんな教育を受けていようと、どれだけの年収があろうと、神がお定めになった人を神がお救いになったのです。そして、感謝なことに神はあなたを選びあなたを救ってくださったのです。ちょうど、このエサウとヤコブという二人の男の子の中で神がヤコブを選ばれたように…。

ですから、パウロがこの中で繰り返し教えていること、それはアブラハムの子孫だから、イサクの子孫だから、ヤコブの子孫だから、彼らみな神の約束をいただいているのではないということです。そ

こにはすべて神の選びというものがあるのです。11節「行ないにはよらず、召してくださる方によるように、」とパウロは繰り返すのです。私たちのこのすばらしい救いは神の一方的なみわざであったと言うのです。驚きではありませんか、皆さん。私たちがこのようなみことばを耳にする度に思うことは、「なぜ、神はこの自分を選んでくださったのか？多くの人々の中でなぜ私を選ばれたのだろうか？」ということです。しかし、見てお分かりになるように、確かに、神はこうしてどの時代でもご自分の民を選んでおられたのです。そのことは確かに、この歴史の中で起こっている事実です。偶然に起こっているではありません。神のみわざが成されているのです。パウロはそのことをこのように私たちに繰り返して教えてくれるのです。

(3) 神の計画の確かさ : 神はご自分の目的に沿って選ばれる

神の選びがある、神の計画は主のみこころに沿って成されて行きます。感謝なことに、神の選びの計画の確かさ、神は決して失敗を為さることがない、神の為さることはすべてにおいて完全であることを示しています。12節「『兄は弟に仕える。』と彼女に告げられたのです。」、そして、その通り神はヤコブを大いに祝されました。もちろん、エサウが祝されなかったわけではありません。でも、神はこのヤコブを通して約束を成就して行かれるのです。

次に出て来る13節のみことばをご覧ください。「『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。』と書いてあるとおりです。」と、非常に衝撃的なことばがここに記されているのです。しかし、創世記の中を見て行くと、どこを見ても神が本当にエサウという人物を憎んで、彼に大変な災いを施されたということは記されていません。私たちがこのようなことばを見た時に、神はエサウを憎んでエサウに大変な災いを与えたのではないか、神は非常にえこひいきをする方のように思ってしまうのです。そのことについては次回私たちは見て行きますが、神がある人を選び、ある人を選ばなかったとするなら不公平ではないのかと、だれしもそのように考えてしまうのです。しかし、今日、私たちがまず見ておきたいことは、神がヤコブを愛し、エサウを憎んだというのは、どうもエサウというひとりの人物を憎んだという意味ではなさそうです。その理由は先ほど話したように、そのようなことが創世記の中に記されていないからです。

では、いったい何のことでしょう？これはエサウの子孫たちのことです。エサウの子孫たちはエドム人です。そして、主は確かに彼らのことを憎んでおられます。なぜ、彼らが憎まれたのか？原因があるのです。神がモーセを用いてイスラエルの民をエジプトから連れ出しました。そして、彼らはカデシュというところにやって来ました。これからその約束の地に向かって行こうとするのです。領土の境の町カデシュにやって来た時に、モーセはこのエドムの王のところへ使者を送り、あることをお願いするのです。「どうか、あなたの国を通らせてください。私たちは、畑もぶどう畑も通りません。井戸の水も飲みません。私たちは王の道を行き、あなたの領土を通過するまでは右にも左にも曲がりません。」、その時に、エドムの王はこう言います。「私のところを通ってはならない。さもないと、私は剣をもっておまえを迎え撃とう。」と。これは民数記の20章のところに出て来ます(17-18節)。イスラエル人はまた彼らに言います。19節「私たちは公道を上って行きます。私たちと私たちの家畜があなたの水を飲むことがあれば、その代価を払います。ただ、歩いて通り過ぎるだけです。」と。ところが、民数記20-21節には「しかし、エドムは、『通ってはならない。』と言って、強力な大軍勢を率いて彼らを迎え撃つために出て来た。:21 こうして、エドムはイスラエルにその領土を通らせようとしなかったため、イスラエルは彼の所から方向を変えて去った。」とあります。このようにエドムは主の民に対して逆らったのです。ですから、その後、サウル王が、ダビデ、ソロモンがこのエドム人と戦っています。そういうことを見ると、どうして神がエドムを憎まれたのか？彼らの罪が原因だったのです。彼らが神に逆らうゆえに神は彼らを憎まれたのです。

もう一箇所、旧約聖書のアモス書を開いてください。アモス1:11-12に「主はこう仰せられる。『エドムの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼が剣で自分の兄弟を追い、肉親の情をそこない、怒り続けていつまでも激しい怒りを保っていたからだ。:12 わたしはテマンに火を送ろう。火はボツラの宮殿を焼き尽くす。』」という主のおことばがあります。ボツラというのはエドムの古い都です。今見てお分かりのように、神はこのようにエドムの罪に対してお怒りになりました。このように見ると、主が「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と言われたのは、エサウ個人を憎んだのではなかったのです。確かに、エサウ自身たくさんの物を所有するようになっています。しかし、このエサウから出た子孫たちが神に逆らい続けた民であったゆえに、神はその罪を見て憎まれたのです。そのことをローマ人への手紙の中でパウロが言わんとしているのです。

さて、もう一度ローマ書に戻ってください。パウロが言わんとしたことは、私たちがどのように見ようと、どのように取ろうと神の計画は変わりなく確実に成され続けて行く、神のみこころだけが成され続

けて行くということです。これまでもそうだったし、これからもそうです。ですから、私たちはその神に信頼を置いて歩いて行くようにと言うのです。

適応：選ばれた目的に沿って生きる

私たちがよく考えなければいけないことを皆さんに幾つか残して終わりたいのですが、今日も私たちが見て来たことは、神は確かに人々を選ぶということでした。そして、あなたもその選びによってこの救いに与りました。救いはあなたの行ないによるものではありません。あなたのわざによって救いを得たわけではありませんでした。そうすると、神によって選ばれたあなたは、どのように生きることによって選んでくださった神に感謝を表わすのかです。また、神によって選ばれたあなたは、どのように生きることを神が望んでいらっしゃるのかです。信仰者の皆さん、私たちはそのことを考えながら生きなければいけないのです。なぜなら、神が選んでくださったのには目的があるからです。神はアブラハムを選ばれました。イサクを選ばれました。そして、ヤコブを選ばれました。そのように神はある人々を選んだのです。そして、このイスラエルも選ばれたのです。何のためにか——？ 選ばれた神の栄光を現わして行くためです。そのために私たちもこの選びに与り、そのために私たちもこの救いに与ったことを覚えておかなければいけないのです。

そして同時に、パウロは私たちの神は約束を守られる方だと繰り返し教えてくれました。確かに、それは真理です。そのように神は約束されたことをことごとく守って来られました。だから、私たちも今救いを確信して喜んで今日を生きることができます。死んでからのことを心配しながら生きる必要はありません。救いは永遠のものだからです。神によって救われた者は確実に救われ続けています。神が本当に救ってくださったのなら……。もし、そうでなかったら、自分をよく吟味するなら、その救いが与えられていないことが分かります。なぜなら、救われている者たちは神に喜ばれることをしようとすし、神の栄光を現わすことをして行こうとするからです。

そして、最後に考えていただきたいことは、「神が約束を守る」というみことばを見た私たち、では、なぜ、私たちは神の約束に信頼を置いて生きないのでしょうか？なぜ、神が言われたことをそのまま信じてそれに従おうとしないのかです。信仰者の皆さん、それが分かるならあなたの信仰は変わって来ます。私たちはなかなか神のおっしゃったことをそのまま受け入れることができないのです。どちらかと言うと、神が言われたことよりも私たちの考えていることを優先してしまったり、神の最善を求めるよりも自分の最善と思えることを優先してしまう傾向にあります。だから、私たちは罪人なのです。しっかりとみことばを見て、その教えられた真理を私たちの生活に適用することです。何のために私を選んでくれたのか、目的に沿って生きるためです。神が約束を守られる真実なお方であるなら、その神に対してどのように生きて行くことがふさわしい生き方なのか、そのことを考えてそれを実践することです。それが選ばれた者にふさわしい生き方です。そのように歩むことです、信仰者の皆さん！